

氏名	大村 美玲
学位の種類	博士(美術)
学位記番号	第89号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	絵画における触覚の一考察
審査委員	主査 教授 西田 真人
	教授 田島 達也
	教授 浅野 均
	教授 綾田 勝義
	特任教授 大野 俊明

## 論文の要旨

「生きた線筆」。書家である母の口癖である。

この「生きた」が疑問であると同時に、実際の体験として日常に目にする絵画もまた生きた絵や死んだ絵というものが存在すると考えていた。「生きた」とは何をもって存在しえるのか考察していく。

自身の制作の中でも、ある一点を超えると絵になる瞬間が存在する。それは闇雲に絵に向き合う時間をかければ訪れるものでもなく、点を落とした時、線を引いたとき、どの瞬間でもなりえるものである。この現象は最低限「絵」になる瞬間であるが、同時に「生きた」絵になる為のやりとりの一部であると考え。この一歩をさらに発展させ、実際に体感する必要があると考えた。本論文はこの点を背景とし、「生きた」絵画の実感を得る為の研究であるとする。対象物では実際の肉体的な動物からくる生命力に存在するものを仮定とし、それは例えば五感から得るものである「生きた」部分であるのか。

また技法的部分では線のみからくる気迫であるのか、またはマチエールからくる生々しい素材感に「生きた」を見出すのか。

本研究では五感から触覚を、技法からたらしこみを取り上げ考察を行う。

第一章では触覚の一般的な認識と定義を取り上げ、触覚に関する心身の事例をあげていく。触覚を使用した制作、また対象物から得る触覚を、一般的な触覚の概念を用いながら新たに本研究で使用する触覚の定義づけを行う。

第二章では絵画における触覚の参考例をあげる。前章で定義した触覚を過去の作例を合わせて検証していく。主にたらしこみを中心とした作例をはじめ、作家それぞれの触覚の在り方を検証する。

第三章では自身の制作における触覚のありかたについて考察する。第一章の触覚の定義を基にどのように絵画の中で使用されていくのかをみていく。また研究の一環として岩絵具の精製を行っている。

終章では実際に精製した岩絵具を使用した絵画とそれまでの絵画を比較し、これにより絵画としての在り方を見直す。また物質感と体感の関係性を改めて考察する。

これまで「生きた」という意味について五感から触覚を取り上げ研究してきた。

どのようにして「生きた」を得るのかという問題について、絵画の制作においては触覚の働きに着目するよりも、触れることにより誘発される個人の心のあり方の方が問題であると結論付けている。

本研究は自身の制作過程においても見直すきっかけとなるものであり改めて新たに展開を臨む第一歩であるとする。

## 審査結果の要旨

氏は本校博士課程入学前に全国公募松柏美術館主催花鳥画展にて二年連続で大賞、優秀賞を受賞していたこともあり伝統的な花鳥画の世界で自分なりの絵画表現を模索したいという気持ちが強く、鳥や四肢動物を題材に、その背景処理も比較的オーソドックスな単一面の濃淡の調子に拘りがあった。そのことで表現力にやや新鮮味が欠き、弱さも感じられた。そのことから日本画あるいは花鳥画の枠に囚われることで制作における窮屈な感じを強めていた。そこで自分にとっての魅力ある絵画表現を油画など西洋美術にも自由に求め模写も試みる。イギリスのマッキントッシュの水彩画を模写したことから、日本画技法の「たらし込み」に注目し、研究制作に積極的に取り組み、また日本美術史上の「たらし込み」表現による作品を研究することで、装飾的效果、心理的效果そして何よりも日本画の実感に繋がる触覚に訴えてくる効果を分析する。

次にシンプルだが深い精神性を感じさせるロスコなどの抽象絵画に見られるコンポジション、マチュールなどの重要性を認識することで、こうした造形思考を日本画の比較的平明な構成に取り入れ、ユキヒョウを描いた「明星」、ジャガーを描いた連作「陽だまり」「惺」「臥」等でコンポジションを強く意識した制作研究を重ねる。

これらの制作を通じて岩絵の具の物質性にも注目、自身で岩絵の具を作ることも試みながら、既成の岩絵の具には無い大きな粒子や結晶そのままの様な形状を残した岩絵の具を使用し、その効果を探る制作を重ね、こうした研究成果から岩と水の相反す素材こそ日本画表現たる独自性に繋がることを見出し、岩絵の具の触覚的な効果、水がもたらす「たらし込み」による触覚的な効果に加え、抑制の効いた様々な白が変化と深味のある色彩美を獲得したことで2015年制作「瀑」では博士課程の成果として十分に評価できる作品に結実させた。

論文は博士課程を通じて制作を重ねることで漠然としていた研究テーマが明確になり、岩と水のもたらす表現の多様性、可能性や実感に導く触覚の効果を確認にすることの制作ドキュメントの範囲ではあるが、研究作品としての完成度、作品量は十分に評価できる。総合的に他の審査教員から異存は無く、本審査合格とした。